

飯田高校同窓会報

第23号
 発行人 松野逸雄
 編集人 松野逸雄
 印刷所 飯田印刷
 印刷 飯田印刷

昭和58年度 同窓会定期総会

八月二十一日(日)
 母校同窓会館で開催

八月二十一日(日)午後一時十二分、長坂好忠副会長の開会の辞により定期総会は開催された。松下逸雄会長挨拶は、大会史上最多の七十九校が参加した第六十五回全国高校野球選手権長野大会の決勝戦に駒を進め、長野商との対戦は実に延長十回2-1で惜敗した野球部の健闘を讃え、中原祐一郎長、宮下良就監督の指導に敬意を表され大体育館建設展望、北部高校断念の経過を語られる。三浦宏校長挨拶は野

球部に対する募金に謝意、陸上部の活躍に触れ、インターハイ全国大会三段跳びで松村寛君(三年)が四位。全国高校十傑強歩の部で中島英俊君(二年)が全国ランキング二位の成績を収めた報告。前回の改修から三十余年を経て三階の天井に雨水がしみて来た為、夏休みを利用して総工費約一千五百万円で長坂組が請け負って、敷きつめていたブロックを取りはずし、アスファルトの防水層の

上に厚さ八センチのコンクリートを打って完成、県庁並みになったと報告。プレハブ二教室の新設が四位。全国高校十傑強歩の部で中島英俊君(二年)が全国ランキング二位の成績を収めた報告。前回の改修から三十余年を経て三階の天井に雨水がしみて来た為、夏休みを利用して総工費約一千五百万円で長坂組が請け負って、敷きつめていたブロックを取りはずし、アスファルトの防水層の

生に大拍手が湧く。議事進行は恒例により松下会長がつとめられ会務報告、昭和五十七年度一般会計収支決算書、市議選久氏より監査報告、承認され、五十八年度収支予算案等の議案が承認される。

役員改選では辞任の松島甫氏をのぞき全員留任、新任監事に大田中一郎氏(中41)が選出承認される。来年からは歌詞の提示をと羽生事務局長に注文を出し佐々木浩平君(高3)リードで校歌斉唱。

万才三唱は木下隆氏(中34)、外松淳副会長の閉会の辞で幕を閉じる。小休止の後、記念講演は明治大学助教授、後藤柳田国男と伊那谷(高4)氏の「柳田国男と現代」を聴く。

講演会終了後、恒例の懇親会を行うも出席者八十有余名は一抹の淋しさがたがた。今後会員各位の参加が望まれた。

柳田国男と伊那谷 柳田国男は旧姓松岡と言いますが、江戸時代の中頃から、飯田藩主堀家の江戸家老をつとめた柳田家の十代目、直平の嫡養子に迎えられました。

彼はこの地を先祖の地と、かしい青春の一時を過ごさせていたいた母校にお招きいただきまして大変嬉しく思っております。つたないお話をするのは照れくさいことではありますが、私が二十年来研究してまいりました日本民俗学の創成者柳田国男の思想と学問について、さうらに彼が掘り起こしてきた民俗文化が、今日さまざまな領域で再評価されているわけですが、柳田国男の再評価とは何か、についてお話し申し上げたいと思います。

記念講演

柳田国男と現代

明治大学助教授 後藤藤

総一郎(高四回)



もう一度ここで掘り起こし軌道修正をしたいという考えが、特に一九七〇年代のオイルショック以後、さまざまな領域で取り上げられています。その糧として柳田が残していた民俗学を照らし出して、その中から前に進むべき何かを学んでいきたい。そういうことが柳田に関する関心の高まりとなつて今日現れている、ということが言えるかと思えます。



私は、去る七月十七日の幹事会において、会長に選出され、八月二十一日の定期総会の席上にて、四期目の会長に決定致しました。従いまして、同窓会の責任者になって、本年で七年目になります。相変わらず、会員皆様方の御協力をお願い致します。

この間、母校並に同窓会においては、多彩な行事や、事業が盛り広げられて来ました。三年前の独立八十年記念式典を始めとする行事、三ヶ年計画による現校舎や講堂の内装その他整備事業、昨年の長姫

御挨拶
 同窓会長 松下逸雄

高校跡地への記念碑建立事業等々でありました。本年は野球が以外に強く、最後まで頑張つて、面くらってしまいました。決勝戦迄の進出は、戦前の諏訪番系(現・岡谷工業高校)との対戦、二十五年前の松商学園との対戦と今回が三回目でありました。

あれよあれよと言う間に決勝戦迄進出し、甲子園への夢が、八十三年ぶりに叶うのかと、嬉しいやら、また、甲子園へのキッ

プを受取ったら、どうするのかわからず、不安感も伴ってあわててしまいました。七月三十一日の決勝戦には、長坂副会長等と応援に出かけました。皆様も御承知の通り、準々決勝、準決勝同様に、初回に先取得点をものにして前半は有利に試合を進め、後半は有利に試合を進め、新聞社が、インタビューに来ては、いよいよ甲子園だね、と言われて悪い気はいたしませんでした。然し、延長戦の結果、二対一で惜敗はしたものでありました。

なほ、今でも長野に行くと野球の話が出ると、「飯田高校は案外強いじゃないか」と言われ、野球と言ふものは、強ければ名が売れるものと、驚いているところでもあります。明五十九年か、又は六十年にでも、良い夢を果してもらいたいものです。大体育館は九月入札、来年八月竣工の予定であります。又各棟に別れていく特別教室も統合して第二校舎を建築する件も県教委で、計画を進めています。

これ等の学校改善整備並に拡充問題について全う叶えられるよう努力致す所存であります。最後に、会員皆様方の各地での御健闘と御多幸とを祈念致しまして、御挨拶とします。

柳田国男がどうして日本の民俗学を研究しようとするに至ったのか、彼は東大を出て農商務省に入り、そこで後に東大の学長となる新渡戸稲造の「地方の研究」に述べら

れた思想、「新しい国家政治は上からのものではなく、地方のありようを積み重ねたうえに存在すべきだ」という理念に大いに影響をうけるわけだ。それでは地方のありよう、即ち日本人の伝統的倫理観をどうやって掘り起こすのか。彼はドイツ・ロマン派の詩人ハイネが伝統的ドイツ精神を、

しているものを、(目に)見えるもの、(耳に)聞けるもの、(心に)映るもの、という三つの観点にわけて探究したわけだ。目に見えるものは冠婚葬祭・年中行事・節句や人生儀礼といったもの、それらの意味を時代ごとを追っていきわけだ。さらに耳で聞いて伝え

文明の波に荒らされない森の中や離島の人々の中に発見していった方法を学ばなければならぬ。もう一方では当時ヨーロッパ第一の文明批評家アナトール・フランスの「白石の上にて」を読むことによって、未来を設定するには過去を学ばなければならぬ、という考え方を得るわけだ。この柳田の残した仕事を、今日我々はどう見ることができようか。

柳田学と現代 歴史が荒々しく変転していく中で、私達は明治とか敗戦とかいうものを取り払って、もう一度新たに日本人のものと姿を見直さなければならぬのではないかと、伝統的な精神や歴史というものを

講師紹介 昭和八年下伊那郡南信濃村(遠山)に生る。昭和二十七年飯田高校高等科第四回卒業。明治大学政経学部、同大学院博士課程修了。東京教育大講師を経て現在明治大学助教授。日本政治思想史専攻。主な著書に「柳田国男論序説」「柳田国男の思想」「柳田学」の思想的展開「天皇神学の形成と批判」など。現住所鎌倉市雪ノ下四一三三十五

文学者特集



ふる里 伊那谷

桐 鳩十 (中22)

思い出った時が吉日で季節を問わず、年に二、三回は伊那谷に帰ってくる。

何しろ中央アルプス、南アルプスという、どこかい山にかこまれた里である。伊那谷にはいつてっかい山々が盛り上って、どこまでも、どこまでも、続いているのを見ると「郷里に帰ったなあ」という気が、心の底から湧き上ってくる。

秋の頃に竜坂に立つと黒山のその奥に、アルプスの峰が見える。その峰は、アラビアの天幕のように、頭だけを突きだして、まっ白い雪に輝いているのだ。ただ、それだけのことだが、心が、ドキッとすると新鮮に感じられるのである。漢詩の結びの句のように、アルプスという山を、美しく感じさせる役目をしているのである。竜坂を通る時、運よくあの雪峰に出会うと、何か、幸福と出会ったような気がするのである。

澄み切って、澄み切った、これ以上澄むことが出来ないほど、空が澄んで見えることがある。そういう日のアルプスの夕焼けは美しい。紅に染めた透明なガラスのような夕焼けである。この夕焼けがやがて薄れていくと、一つ一つと金の夕星が光り出す。伊那谷でなければ出会えない美しい眺めである。

伊那谷の夜もよい。この谷には、大都會がないので、ちゃんと、昔どおりの夜らしい夜がある。都会では、闇が亡びてしまったが、ここには谷を埋めつくすほどの闇がある。そういう闇の谷間の遠くの村々である。花火もよい。天竜川の土堤で、かつての日の美しい思い出のように、かすかに光っては、たまゆらに消えていく。遠花火を眺めるのも、郷里での楽しみの一つである。

失われ行くものが残っているといえ、遠山郷の八重河内里もそうだが、ここには、遠山川の支流にアミノ魚を放して、網みどりをさせた後、料理してくれる家がある。私

はこの里に、毎年のように出掛ける。川の水が、そのままだ飲めるからである。手が切れるほど冷たいこの水でといた米で飯をたき、この水で入れた茶を飲む。アミノ魚の魚田を眺めるのである。日本の川はほとんどが死んでしまった。が、ここでは、川が生きているのだ。ほんものの日本の川が息づいているのである。伊那谷は、自然もよいが、人間もまたよい。散歩して、ナスなどどっている人に声をかけると、「とりたてのナスだに、食べてみなしよ」といって、ナスを持って土壇を駆け上ってくるのである。桃をとっている人に声をかけると、「うちのやつ食べてみるかな」といって、桃をくれたりするのである。

願見りの為に、声をかけられると、何かやりたくなくなってしまっているのである。素朴な、ほんとに素朴な心である。遠い日の日本の心を持った人々が、ほろほろするような純情な人たちがこの谷では、畑を耕し、カイコを飼っているのだ。五十八年の現在も、そういう人たちが暮らしているのである。

薪木の村歌に「類まれなる薪木村」とあるが、まことに、まことに、「類まれなる伊那の谷」であります。(一九八三・九・五)

編集部註 児童文学者 本名・久保田彦雄

飯田美術博物館への夢

印南 喬 (中22)

これは夢ではなく実現可能なおぼろげなものである。今年の七月、飯田市長と市の広報室美術博物館準備局長から公式の招請状が届き、生前から日夏耿之介とは最も親交の厚かった松下英麿が病氣不参のため、博物館設立に関する懇談会と、日夏耿之介の講演に、わたしが参上する羽目になった。

共により自ら主催する形で、設立の趣旨についての構想とヴィジョンが説明、了解され、意見の交換も行われて、出来る限り早急に実現に向けて準備活動に入ろうという結論を得た。

必要とされよう。幸いにあと建設地が県から譲渡された旧飯田中学、飯田商業の跡地で、立地条件は誰れがみても申し分ないであろう。

設立企画の動機は、飯田出身の文化的功労者は数多いが、中でも日本画壇の第一人者日夏耿之介の功績を顕彰し、水

くその栄誉を後世に伝え、後に続く者の育成に役立てることは、郷土の誇りでもあり、市民としての責務でもあるとする点にある。

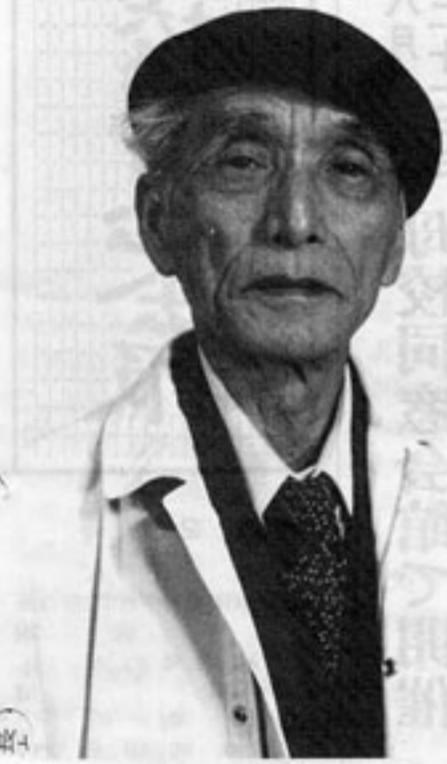
春草の修学時代は飯田にはまだ中学の全課程はなく、たしか途中で長野か松本に遊学したらしく、わたしの叔父が同期で、生前より春草の落書はなしを聞かされた。

秋之介(樋口登登)は飯田中学二年で上京、叔父宅に寄宿、十四歳にして各種新聞雑誌に寄稿、同人誌を主宰して詩作評論に神童的片鱗を示し、病弱よく八十一年間を文章活動に傾注した。名著「明治大正詩史」をはじめ著訳その他蔵書約二万冊、その大半は現在飯田図書館に委託保管されているが、その遺墨、

片や外柔内剛の河竹、こなた外剛内柔の日夏と

両者相反するが如くみられるが、実は共に外柔内剛が真の姿で、如何にも信州人の典型的人柄である、わたしは以つて範としている。

(元早大教授、現財団法人道徳協会理事、三船芸術学院顧問教授)



昭和五十六年八月の飯田高校同窓会総会でこの旧校地に記念碑を建てる事が可決され、九月十一日には建設委員十名が石屋は誰にたのむべきか、等の詳細な検討を行い、つ、近くにある碑を巡視し、碑石の原材等を見て

「長姫城頭空高く応援の旗ひるがえり……」というの飯田中学の応援歌である。しかし、当時の県立飯田中学校は旧飯田城址二の丸にあった。私は五年間の校舎に学んだ。宿直室の側に大きい桜の木があり、寄宿舍の東には立派な松があった。



青雲の碑と両校同窓会長

青雲の碑

大澤 和夫 (中22)

た長姫高校同窓会でも記念碑を建設することが確定した。そして十月二十四日同窓会の建設委員が合同で会議を開き、同窓会一掃になつて一つの碑をたてること、費用は同窓会で平等に負担すること、同窓会より三名ずつの専門委員を出し原案を作成すること、同校の事務長も専門委員に加わることがスムーズに決定された。

飯田高校側としては中22丸山昌寿、中29太田茂穂、中42東原実の専門委員としまり、長姫高校側も四人が選ばれ十一月十二日建碑専門委員会が開かれ、委員長に大沢が副委員長に長姫の卒業生新井金市氏が選ばれた。以後十数回の専門委員会を開き、碑の形はどんなのがいいか、縦長か、横書きか、表面の文字は何という字にするか、この碑のいわれは表に書くか裏に託すか、副碑を建てそこに記すか、碑石はどんな色の石にするか、台石は花崗岩がいいか、碑を建てる場所は校内のどこがいいか、いつ建てるか、いわれは誰が原案をつくるのか、碑の文字は誰に書いてもらうのか、石屋は誰にたのむべきか、等の詳細な検討を行い、つ、近くにある碑を巡視し、碑石の原材等を見て

回った。一番問題になった碑のいわれの銘は専門委員会検討補正をした上で原案が完成したので撰文は強いて言えば専門委員会ということになる。昭和五十七年二月十二日、同窓会の建碑委員全体会を開き、碑の表面は青雲とすること、碑のいわれとともに中学十七回卒業で久しく長姫高校の校医をされた前島忠夫氏に書くのを依頼すること、工事は沖田房三氏にたのむことが全員一致で可決された。

以後長姫高校が八幡原に移転し、校舎が取り払われた後、県の天然記念物になっている江戸時代からあるエドヒガンの巨木の下に「青雲」の碑が建てられ、十一月二十一日に同校関係者が集って除幕式が行なわれた。碑除に刻まれた建碑のいわれは次の如くである。

此処 飯田城二の丸跡は明治十七年長野県中学校飯田支校が移転開校以来百年の長きに亘り兩信青年諸生の勉勵琢磨の庭であった。明治卅三年長野県飯田中学校がこの地に於て独立、大正十五年同校が高松台地に移転後飯田商業学校が挙げてここに拠つた。昭和廿三年学制改革により長野県飯田長姫高等学校と改まり今日に及んだ。今回同校が矢高原移転に伴い思い出多い学び舎の跡に青雲の志に燃えた幾多の青年の若き日を回顧し、同校同窓会相携えてこの碑を建て水世に記念する

昭和五十七年十一月
長野県飯田高等学校同窓会
長野県飯田長姫高等学校同窓会

支部だより

北海道

今年の春の総会は六月十八日(土)夕刻、札幌のホテルサンフラワーで開かれた。今回は久しぶりに北大に二名の新入生を迎え、また同郷の飯田長姫高校出身の数名を加えて、三十名余りの出席となった。

常磐

常磐支部は昨年結成され、本年度の第二回定期総会は五月二十九日、昨年同様松戸市にて開催。来賓として本会より松下会長、原在京同窓会幹事長のお二人をお迎えする。支部会員四十一名が出席して盛大な支部総会となった。



で懇親会が盛大に行なわれ、さらに二次会、三次会と流れて、各グループごとにスキンの夜を楽しんだ様子である。席上わずか数名の学生の集まりに始まった本会が、このように発展したことは今昔の感に堪えないといふ。小林副会長はじめ、古い会員の感想があった。また一昨年は伊沢集治先生、昨年は大沢和夫先生のお話を聞くことができた大変楽しかったので、今後もこのような企画をつ

関西

秋晴れの九月十五日(敬老の日)大阪府下は湯津峡口、釜淵の「かじか荘」に於て第十九回飯田高校関西支部同窓会を開催した。出席者は本部飯田より出席者三十三名、ご来賓四名、ご家族七名、計四十四名。

関西

本年三月、関西が誇る代田会長ご逝去の為、あの柔らかな笑顔に接することが出来ず一抹の淋しさを感じた。ご来賓として母校事務局長東原美穂、関東支部幹事長原正一様、故代田会長運転手高橋益三様から御挨拶を頂く。

が披露されて一同爆笑、又原幹事長からは在京同窓会を今日までまとめて来た苦労話について詳しく説明があり一同感激し

静岡

大先輩で、恩師である長野県考古学会会長 大沢和夫先生が、わざわざ御来臨下さって、盛大に有意義な総会を開くことが出来た。昭和五十八年七月九日静岡市榎原町クレーポール会館。出席二十八名。

伊賀良

伊賀良支部(伊藤喜明支部長、六百五十名)では八月十五日午後三時から小鈴亭において第五回総会を開き、総会終了後記念講演に大沢和夫先生をお招きして「伊賀良史概要」を一時間余に亘り聴いた。

田中克人(中47) 村澤文夫(中47) 決定、就任された。今回も又ご家族も交えての懇親会、終始和気あいあい盛會裡に万才三唱来年神戸での再会を約して解散した。

中京

本部より御多忙にもかかわらず、長坂副会長に御来臨賜り、開催した支部総会及び懇親会も、回を重ねる毎に充実し、同窓生の年一回の楽しみ場の場として、定着してまいりました。

丸山

五十七年十一月二十一日、今宵半に於いて第二回丸山支部の総会を開催する。総会次第及び校

三浦幸男 中31 村松和司 高1 武井吾朗 高3 宮川公文 高6 来年の総会も二月二十五日に決定し、各回幹事が中心となって、新会員の発掘、勧誘に尚一層努力する事となりました。

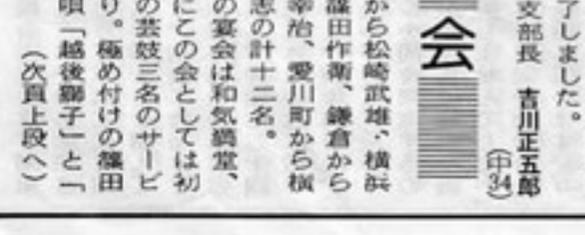
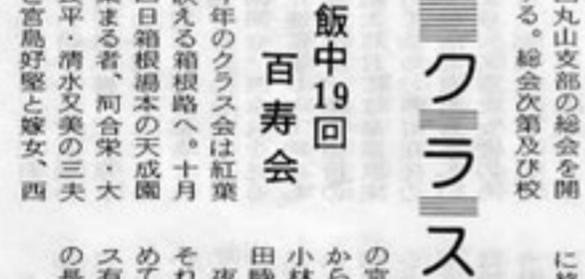
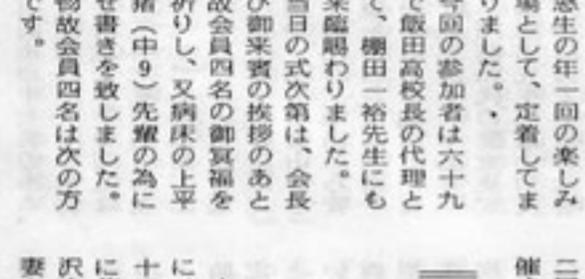
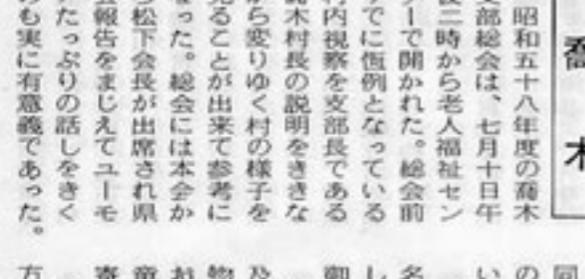
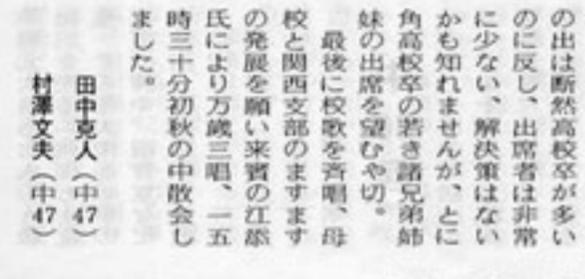
松尾

五十八年度総会が八月二十七日午後六時より八幡鳥清(同窓生宅)で開かれた。集った者五十余名、松下会長も出席された。野球部応援金十六万円が集ったことを報告し、役員は全員従前通りとする。とを決議した。

飯中19回百寿会

今年のクラス会は紅葉に映える箱根路へ。十月十四日箱根湯本の天成園に集まる者、同合衆、大沢良平、清水又美の三夫妻と宮島好堅と嫁女、西

歌を筆太に岩戸副会長が腕を振り十八名の出席者あり、本部より市瀬氏が会長代理として出席下さる。丁度当日は「青雲の碑」が設立されたので祝賀会が開かれたので幾人かの同窓生がそちらの方に参加されたが、盛大に行われた。本年度事業として在任者名簿(飯田市



(前頁下段より)
館山節)のノドに続いて
宮島が珍らしく童謡数番
を歌うにつれ一両手拍子
で合唱、まるで幼稚園に
若返ったよう。終りに松
崎の十八番「深川踊り」
でお開きとなる。あと一
室に集まり明年度の打合
せ等談話ひとしきり。
翌朝館前で記念撮影後
小田原で解散。更に藤田
の案内で横浜見物に出掛
けたのは、小林、河合夫
妻、横田、松崎、藤田の
六名。先づバスで港の見
える丘公園から異国風情
漂う外人墓地を巡り、展
望台から雄大な横浜港を
一望。正午は山下町の中
華街で広東料理の珍味佳
肴に舌鼓を打って饗腹。
明年「石和」での再会を
期して散会した。

中25回
今回は大方の要望によ
り、天竜舟下り計画、
六月九日午後四時飯田駅
前、昭和三十三年に母校
を創立した二百六十余
名の仲間が、昨年十一
月十日母校講堂に、大
集合して懐かしい恩師や
級友と、再会し、二十
五周年記念式典を行な
った。

人生で一歩忙しい我
々の年代にもかわら
ず、全国各地から、こ
のように多勢の方が集
まる理由は何んであろ
うか。

第一に今日ある私達
を培ってくれた母校と、
青春時代の夢や、燃え
るような情熱を、人生
の半ばにきた私達の年
代でふりかえり、今迄
の人生航路をながめる
事が出来る事である。

に集し、ハイヤーに分乗
し、温泉の旅館に宿泊。
全館貸し切りの家庭的雰
囲気の中で、一夜を飲み
明かしたのち、午前十時
弁天港より十八人が乗船
して十三キロを約一時間
で下る。

好天続きの水量減少で
自転車程度の速さ。波風
起らず甚だ穏やかだが、
薄くなった頭だけがヤケ
に暑い。唄の文句の飛沫
のかかる所は僅か三、四
か所のみである。

舟から下りてホテルま
で、子供の頃には威勢よ
く駆け上ったのに、何と
も大変で十五分から三十
分もかかって、やっと迎
りついた次第。汗を流し
たあとのビールがうまい
こと。饗腹になった者か
ら次々とダウン。ザル甚
の連中のみ昨夜からの因
縁試合を続けており、二
時の急行時間まで有効に
消費。

大成功だったが、健康上
の理由で欠席というのが
年々増加することは残念
である。 仲田丈夫

中29回
二十九という数字をも
じって「不朽会」と名乗
るようになったのは数年
前のことである。地元
の同級会と東京を中心とし
た地元を除く同級会が、
合同の不朽会を開いたの
は、三年前の昭和五十五
年春の「卒業第五十周年

記念」の会。翌五十六
年には、地元不朽会が幹
事役で、春らんまんの木
主の少年も、それぞれ、
偉風堂々の母親に、又髪
の毛の少ない中年の紳士
に愛されている。更には我
我の子供が再び母校で親
子二代同期生になってい
る。

第二に同年生の連帯意
識と友情である。飯高
名前を呼び捨てにできる
さがある。

都会で定年に
なったら、余
生はふるさとに帰りたい
ものだ。

二十五周年の記念とし
て、母校へエレクティ
ンを寄贈し大いに喜ばれた。
又無念にも既に黄泉の国
に旅立たれた、三人の恩
師と、九人の同年生の遺
影を前に、厳粛な静寂の

英機元大尉ら七人のA級
戦犯を祀る「殉国七士之
墓」その他大東亜戦争の
英霊の碑や、観音堂など
を参詣して浦田駅で解散
した。

中30回
中学三十回の同級生が
五十七年十月十六日飯田
で開かれたが、この日は
飯田高校の東京支部総会
の前々日に、常連の参
加が少なく十七名だった。
その翌月に「飯中30回
の会々報」を発刊し、各
人の近況短信や、会のニ
ュースを編集し掲載。年
毎にアルコールの消費量
も減少し、幹事苦心の三
味線も手持ち無沙汰で
あった。 中島君男

中36回
残暑厳しい五十八年八
月二十八日。正水寺に於
て、同年生と遺族の
もと、同年生と遺族の
涙と、かすかなすすり
泣きの中で、万感胸の
中に追憶式を行なった。
式典終了後、信金ホ
ールで記念パーティー
を行ない、全員で人の
輪を作り、母校校歌、
校歌を感懐に胸を打た
れながら熱唱、飲むに
つけ、歌うにつけ、お
互いに学生時代の心な
りが広がった。

中40回
昨年から今年にかけて
還暦の節目か残念乍ら逝
去した同級生が五人。そ
れにしてもちよつと酷い
ではないか、何時俺に順
番が廻って来るかも知れ
ない。今の内に連中の顔
位見とおきたいものだ等
冗談のうちにも同級会開
催の声が各処から盛り上
り、八月二十日十六時、
松葉に集った。何時もは
二十名位なのに三十三名
出席という盛況。東京か

同級生四十七名のうち
北原匡君は故人、今村神
吾、森本美沙子の両名は
住所不明。三十四名に連
絡、二十二名の出席、話
の尽きないひとときを過
す。皆それぞれの分野で
活躍中。遠くは富山から
新井勝己君、飯田から安
達謙一、熊谷久通君、
浜松から山岸義直君、女
性は佐見俊子、中島せつ
子、川越和代の三女史、
恩師唐木先生には山口貞
夫君の尽力で七宝の大き
な花瓶を記念品として贈
呈、盛會のうちに終宴
再会を約す、感謝、感謝。
今村義郎(鎌倉)

高七会
昭和二十七年入学一年
D組は、化学と音楽を選
び、当時の理科と芸術科の
組み合わせでクラス分けが
行われ、物理と美術、生
物と書道等いくつかある
中で、わがクラスは他と
くらべて女子が多く、は
なやかな雰囲気であった。
多いといっても六名。
たいしたことはないが、
女子の絶対数が少ない中
で、毎年の同期に会を開
くことになった。わが同
級会も趣々老境に入り、
纏って来た感じ。お互い
交流し、旧交を暖め、残
りの人生を楽しく過ごし
たいものである。都合で
本年参加出来なかった人
も来年は是非お出掛け下
さい。楽しいものです。
馬場 滋

在八松会
飯田高校第八回(昭和
三十一年三月卒)卒、在
京者の例会は、第五回よ
り毎年六月第一土曜日夜
日本工業倶楽部で開催さ
れるようになり、漸く定
着化してきたところで、
今年七月周年を迎え、
六月四日十八時より二十
一時行われました。

八松会同窓生は、関東
地方に百四十余名居住さ
れており、卒業生三百四
十八名の四十名を越えて
います。例会には毎年そ
の二十五名前後の出席者
が参集し、今年も三十四
名が出席され盛大に行わ
れました。例年当日は、
講演会やゴルフコンパニ
ションを同時開催するの
ですが、今年特別企画
は計画しませんでした。が
今秋ゴルフ同好会のコン
ペ企画しています。ゴ
ルフの幹事は田中正支、
所沢和宏両君で、企画が
まとなり次第、追って連
絡の予定です。



飯田高校同窓会報の発行所である、飯田市から太田茂徳の諸君である。

高10回の25周年盛況

付合ひ、仕事の利害得失
のない付合ひ、言いたい
事を勝手に言える付合ひ
ある時は助け合ひ、ある
時は喧嘩し、死ぬ迄友情
を育てる付合ひ、これが
同年生の連帯意識と友情
であると考へる。

第三は望郷の念である
付合ひ、仕事の利害得失
のない付合ひ、言いたい
事を勝手に言える付合ひ
ある時は助け合ひ、ある
時は喧嘩し、死ぬ迄友情
を育てる付合ひ、これが
同年生の連帯意識と友情
であると考へる。

第三は望郷の念である

同級会

昭和二十七年入学一年
D組の同級会を去る五月
二十二日、ホテルオーク
ラに於て恩師唐木光一先
生を迎えて開催。

同級生四十七名のうち
北原匡君は故人、今村神
吾、森本美沙子の両名は
住所不明。三十四名に連
絡、二十二名の出席、話
の尽きないひとときを過
す。皆それぞれの分野で
活躍中。遠くは富山から
新井勝己君、飯田から安
達謙一、熊谷久通君、
浜松から山岸義直君、女
性は佐見俊子、中島せつ
子、川越和代の三女史、
恩師唐木先生には山口貞
夫君の尽力で七宝の大き
な花瓶を記念品として贈
呈、盛會のうちに終宴
再会を約す、感謝、感謝。
今村義郎(鎌倉)

高七会
昭和二十七年入学一年
D組は、化学と音楽を選
び、当時の理科と芸術科の
組み合わせでクラス分けが
行われ、物理と美術、生
物と書道等いくつかある
中で、わがクラスは他と
くらべて女子が多く、は
なやかな雰囲気であった。
多いといっても六名。
たいしたことはないが、
女子の絶対数が少ない中
で、毎年の同期に会を開
くことになった。わが同
級会も趣々老境に入り、
纏って来た感じ。お互い
交流し、旧交を暖め、残
りの人生を楽しく過ごし
たいものである。都合で
本年参加出来なかった人
も来年は是非お出掛け下
さい。楽しいものです。
馬場 滋

在八松会
飯田高校第八回(昭和
三十一年三月卒)卒、在
京者の例会は、第五回よ
り毎年六月第一土曜日夜
日本工業倶楽部で開催さ
れるようになり、漸く定
着化してきたところで、
今年七月周年を迎え、
六月四日十八時より二十
一時行われました。

八松会同窓生は、関東
地方に百四十余名居住さ
れており、卒業生三百四
十八名の四十名を越えて
います。例会には毎年そ
の二十五名前後の出席者
が参集し、今年も三十四
名が出席され盛大に行わ
れました。例年当日は、
講演会やゴルフコンパニ
ションを同時開催するの
ですが、今年特別企画
は計画しませんでした。が
今秋ゴルフ同好会のコン
ペ企画しています。ゴ
ルフの幹事は田中正支、
所沢和宏両君で、企画が
まとなり次第、追って連
絡の予定です。



昭和四五年三月、第二回卒業生一同により、校歌碑を建立、贈呈した。その折、建立の経緯・神話等を記録して置く必要があると考へた。それに伴って、作詞者・作曲者の経歴等から書かねばならない。作詞者については概ねわかってはいたが、作曲家井出茂太先生についてはよくわからず、教育会館に福島豊先生(中八回)をお訪ねしたりもしたが、はっきりせず、気が掛りつつも、もう駄目かと思つていたところ、上伊那農業高校に転勤された竹入弘元先生が上農同窓会報へ発表された資料を今般入手する事が出来たので、先ずその中より関係部分を原文の儘掲載する。

昭和四五年三月、第二回卒業生一同により、校歌碑を建立、贈呈した。その折、建立の経緯・神話等を記録して置く必要があると考へた。それに伴って、作詞者・作曲者の経歴等から書かねばならない。作詞者については概ねわかってはいたが、作曲家井出茂太先生についてはよくわからず、教育会館に福島豊先生(中八回)をお訪ねしたりもしたが、はっきりせず、気が掛りつつも、もう駄目かと思つていたところ、上伊那農業高校に転勤された竹入弘元先生が上農同窓会報へ発表された資料を今般入手する事が出来たので、先ずその中より関係部分を原文の儘掲載する。

ばらしい校歌は他に、作曲家井出茂太、伊賀良と私は思っているが、その制作が右に示された通りとすれば何ともうらやましい。片や音楽学校出の新進音楽家、片や高師出の青年詩人。この二人が信州の大都市飯田でめぐり会い、楽しみながら作った校歌、殊に福沢氏は新任の年である。作者の非凡に驚嘆するが、それを校歌に採用した学校も偉い。上農校歌は相前後して飯田を去り、奇しくも再び松本女子師範で一緒にあった二人がコンビで委嘱され大正四年に作られたものである。(関係部分転載以上) 尚竹入先生は現在伊那野生ヶ丘高校教

校歌碑建立の顛末

福沢悦三郎・井出茂太 倉沢興世のこと

下伊那農業高校教諭 大場勉

論。昭和四四年より五十年まで飯田高校勤務。五十年より五五年まで上農高校勤務。福沢悦三郎先生が鉄道院総務課長となつたのは松本市長小里氏を評した失言により退職して上京してからである。後京都師範で水年勤務して、從七位に叙せられた。伊那町歌は上農と同時代作。作曲は長谷部己津次郎。山本小学校校歌は昭和三年作詞作曲。三穂小学校校歌は明治四二年福沢青龍作詞とあり、作曲もか?その他川路小学校校歌明治三八年作、

美事務長と私が先生宅を訪問、お願いし快諾を頂いた。尚校歌は現在三番は唱和されてないが、原作のままとし、千余の学徒と歌われて居るのは現在の儘とした。また、碑陰は加藤寛美PTA会長にお願いした。ところで、本校に学び朝夕仰ぎ見る、倉沢興世先生作「希望の像」に何かを感じたであろう生徒諸君は既に一人にもなるだろうか。又今後永劫に本校に学ぶ者はこの像に接して何かを感じて欲しい。飯田高校生の気概を移して「希望の像」の制作をお願いしたのも先生で

年限五年、研究科三年で研究科は成績優秀な者のみが入学を許されることになって居り、研究科卒業までには八年の歳月を要した。美術学校に入学した氏は、郷土出身の岡竹繁俊先生を訪れ、書生として働きながら通学した。ところが、大正十二年関東大震災で重傷を負われ、これが先生の一大転機となったと思われる。やむなく帰郷して傷を癒された氏は、再起を期して岡崎へ移られ、教員養成所の同級生で、伍和出身の松井和志夫氏(既に岡崎・杉浦家の養子となり後三河碓石の社長を嗣ぐ)を訪ねたところ、激勸され、新しい服と金を贈られて上京した。その後、とめ夫人と一体となった親身な長い間の援助が続くのであるが、倉沢氏はこの友情厚意を遠慮しながら受けられた。帰京後、岡竹家を辞して独立した倉沢氏に、昭和七年頃まで書生をされて居たのが木村助治郎氏である。(先生より八歳位年下)昭和五年十一月結婚された奥様に、木村を大切にしよう。てくれ、あれはいい奴だ。当時俺は彫刻の事に没頭して居り、思い出した時金の入った時、適当に金を渡して食事等一切の事をやらせて居た。ある時など、「同僚これは、ただの汁だけではいか、何か入れないか」「入れる物がありません」「買ってくればいいじゃないか」「銭がありません」「俺は驚いて「そうだったのか、済まぬ済まぬ、言ってくれば良かったのに、よく米があったな

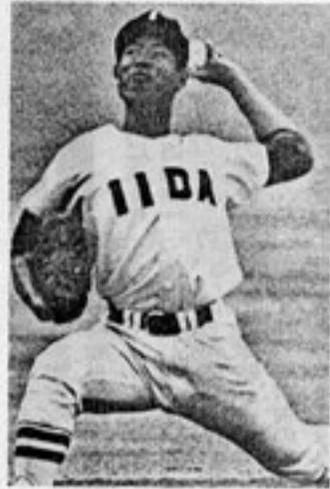
千鶴実兄、中七回。倉沢氏兄丈夫氏、岡竹繁俊氏私の父作治、ともに中六回。親交あり)は新進の彫刻家となった興世氏の作品を母村に留め得ないのを残念に思い、新校舎落成の記念として、作品寄贈を頼み内諾を得た。倉沢氏から金田氏への私信の一部に、……寄付云々の事只今昨年制作の「徳」有之候然し寄付を申し乍ら送費相かけいたたくは如何かと存じ候岡崎方面にて此作品につき話も有之所なれど……(昭和二年三月二八月付)(前記杉浦氏に贈る心組みであったのではなからうか)。……昨年の帝展入選、「徳」奉皇学校へ差上げべく候、但し差上げるものに運賃等いたたくは異にお思いに御座候へども其の辺小生の立場に御同情の上御許し願ふを得ば幸に候、改めて学校又は役場よりお願等を云ふ事は必要無之、何時にても運賃御送付被下は高遠り致し発送可申候……(昭和二年四月三日付)斯くして昭和二年五月「徳」は北小学校へ到着した。その頃より世界的な金融恐慌がはじまり、市町村の財政は極度に窮乏し一般の傾向として教育費削減が対象となり、奉皇村でも他町村に倣って、昭和五年教員給料一割寄付を議決した。着任当初から「徳」に心を動かされていた吉川宗一北小学校長は、倉沢桃雨(黒見、明治五年生)奉皇美術館のこと(昭和二年学務委員(現教育委員)で倉沢氏と一併に奉皇北小学校に奉職した事もある奉皇郵便局長金田一馬氏(後出金田(次頁上段へ))

学 園 だ よ り

長野商	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2
飯 田	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1

25年ぶり県大会決勝戦

無念の1差



力投する林投手

「大会史上最多の七十九校が参加した、第六十五回全国高校野球選手権長野大会の決勝戦は、三十一日午前十時から松本県営球場で行ない、延長十回の末、長野商が2対1で飯田を破り優勝した。試合は決勝戦にふさわしく息詰まる接戦。飯田が一回の三塁打で先取点、長野商は三回佐藤の三塁打で追いつき、両チームは1対1のまま激しい攻防を繰り返した。……白球を追い汗と涙の熱戦の数々……」

二十五年ぶりに決勝戦に進んだ飯田の健闘にも、おしめない拍手がわいた（信濃毎日新聞編・高校野球グラフ第一頁より）

去る七月末の長野県大会出場に際しましては、松下会長さんをはじめ多数の同窓生の皆様には、

戦いを
ふりかえって

監督 宮下良就

部長	中原 祐一	176	76
監督	宮下 良就	179	77
投(左左)	林 賢志③	175	65
捕(右右)	宮沢 康洋③	170	58
一(右右)	久保田 隆③	170	61
二(右右)	岡田 和生③	170	65
遊(右右)	熊谷 真盛③	174	60
左(右右)	岡島 義昭③	169	62
中(右右)	大原 和寿③	175	60
右(右右)	木下 裕一③	168	70
補(右右)	市瀬 明史③	171	62
補(右右)	森谷 光水③	172	63
補(右右)	熊谷 良樹③	169	62
補(右左)	遠山 治彦③	162	68
補(右右)	田中 正彦③	170	63
補(右右)	塚平 章博③	170	63
補(右右)	増田 義孝③	173	

「大会史上最多の七十九校が参加した、第六十五回全国高校野球選手権長野大会の決勝戦は、三十一日午前十時から松本県営球場で行なわれ、延長十回の末、長野商が2対1で飯田を破り優勝した。試合は決勝戦にふさわしく息詰まる接戦。飯田が一回の三塁打で先取点、長野商は三回佐藤の三塁打で追いつき、両チームは1対1のまま激しい攻防を繰り返した。……白球を追い汗と涙の熱戦の数々……」

二十五年ぶりに決勝戦に進んだ飯田の健闘にも、おしめない拍手がわいた（信濃毎日新聞編・高校野球グラフ第一頁より）

去る七月末の長野県大会出場に際しましては、松下会長さんをはじめ多数の同窓生の皆様には、

「大会史上最多の七十九校が参加した、第六十五回全国高校野球選手権長野大会に於て、実に目ざましい活躍を示した。二回戦対東海大三4対0、三回戦対長野中央4対3、四回戦対長野10対6、準々決勝対東海大34対1、準決勝対岡谷工業4対2と勝ち進み、ナインの意気はますます上り、応援団の人数も目まじりにふくれ上り、学校、同窓会、PTAは勿論、地元の方々の声援も並々ならぬものがあった。決勝の対長野商戦は七月三十一日午前十時より松本市県営球場で行なわれた。試合は延長戦に入り、十回表長野商に一点をとられ、遂に善戦空しく、惜しくも今一步のところで甲子園への夢は断られた。破れたとはいえ飯田高校にとつて二十五年ぶりの準優勝は誠に快挙という外はない。この日、応援団はバス十一台を運んだが、それでも乗車できない生徒は多数にのぼった。本校吹奏班も前日の定期演奏会があったこともあり、OBも多数参加し盛大な応援であった。また、同窓会では、本部は勿論、松本支部が準決勝の日から三日間、清水支部長、湯沢事務局長等役員はじめ一般同窓生が支部旗を押し立て、大太鼓を打ちならし、目をみはる応援ぶりであった。なお今大会について各方面より御厚情が寄せられ、同窓会本部は勿論、会長はじめ個人的にも多くの寄付をいただき、松尾・下久堅・森本等積極的に募金活動していただいた支部もありました。」

「(ヘルス)続き」

い、そういう若者が世の中、異様に増した。非行、退学、不定愁訴、カウンセリング……気の重なる単語が周りに溢れ、高校生においては、心身の健康管理は本人の自覚に頼る。その度合が非常に増して来た。知らざるは死も致し方なしの様相が、生活のあらゆる場面に生じて来ているのだ。

さて、その自覚を促す方策は……もとより決め手は無い。が「健康関連知識」つまり「生活の知恵」的なものを、小刻みに与え、受容していく、そんな方策が存外有効ではないのか。

今ここに、二冊の手刷

「(ヘルス)続き」

聞を綴じたものがあふれこれ、割合と手際よくまとめられている。読んでいけば、知らず識らずのうちに、健康に気を配るようになりそうだから、文章もなかなか読ませてもらいたい。

発行までの手順をみると、先ずミーティング、特定のテーマ設定、次いで集のテーマ設定、次いでネタ集め。

ネタは、多くを、保健健康医学雑誌に頼る。委員は医学者ではないから確かな書物から得た知識を、記事に再編成したりそのままだりする。校内で耳にする悩み、質問をテーマに据えることもある。

本校生休位十年前との比較、強歩に備えて、クラスマツチのために、な

ど校内行事に直接関連しての特集も編む。出来上がった原稿は、養護担当教師が、しかと検閲する(間違えがあると大変です)。よしとなつて発行、全員配布となる(受取拒否は認められない)。

彼等委員には、委員としての本来の仕事もあるし、高校生としての自分の生活もあるから、月二回の発行でも結構に大変である。

しかし、「青春前期にある飯田生を病害から守る保護機関」＝厚生省、の自認と若さに支えられて、発行も最近とみに快調であるし、頑張っている。一回の記事量もそれ程

に優勝、硬式テニスはダブルス、シングルスともに一位となりました。陸上は一位飯田一五五点、二位赤穂五五五点、三位伊那北四八八点と優勝しました。

北信越大会には水泳で村沢慶昭百メートル自由形(五位)、小林千夏百メートルバタフライ、リレー(村沢、柳沢、野竹、松井)が出

多くはないし、生徒一般の興味関心に応える内容でもあるし、カットも多めのミニコミ紙スタイルだから、読まれ率は高い。常時七割は越えるとの調査結果もある。

こうして流され、受容された知識は、保健科等の授業と相まって、生徒たちに於ける現在未来の健康に、極めて重要な影響を与えるに違いない。

創刊より七年、ということとは、歴史的にはまだまだ浅い、ということになるが、養護担当教師の健康に対する意識と委員諸君の知的関心が絡んで始まったこの仕事、よい紙面作りを目指して、更に学習を重ね、その歴史を延ばして欲しい。

全国大会で 松村 三段跳で堂々第四位入賞

運動クラブも野球部に勝るとも劣らない活躍がありました。八月に名古屋を中心に行われた高校総体には次の班の七名が出場しました。昨年は三名でしたので、倍増となりました。

陸上競技

- 松村 三段跳
- 木下純市 三千米障害
- 後藤芳久 五種競技
- 卓球部
- 伊藤俊範 シングルス
- 軟式野球

南信大会

バドミントン初V、卓球男子は完全V、剣道、硬式テニスもV、陸上は優勝。

南信大会の主な成績は次のとおりです。

バドミントンは団体で男子が初優勝、女子は準

全国高校総体

運動クラブも野球部に勝るとも劣らない活躍がありました。八月に名古屋を中心に行われた高校総体には次の班の七名が出場しました。昨年は三名でしたので、倍増となりました。

陸上競技

- 松村 三段跳
- 木下純市 三千米障害
- 後藤芳久 五種競技
- 卓球部
- 伊藤俊範 シングルス
- 軟式野球

南信大会

バドミントン初V、卓球男子は完全V、剣道、硬式テニスもV、陸上は優勝。

南信大会の主な成績は次のとおりです。

バドミントンは団体で男子が初優勝、女子は準

県・北信越大会

県大会へ出場した班は弓道、剣道、軟式野球、硬式野球、バドミントン、

福沢 保徳 佐々木直之 後藤 芳久 木下 純市

藤本晃人

県・北信越大会

県大会へ出場した班は弓道、剣道、軟式野球、硬式野球、バドミントン、

福沢 保徳 佐々木直之 後藤 芳久 木下 純市

藤本晃人

寄贈品紹介

- ◇「山頭火の細道」 中島 俊彦(高5)
- 宮川 公文(高6)
- ◇「歌集大雁塔」 田中 正明(中29)
- ◇「なぜ教科書は 偏向したか」 田中 正明(中29)
- ◇「教科書騒動と アジア友好への道」 田中 正明(中29)
- ◇「我が国工学百年の 歩みと展望」 葉賀七三男(中38)
- ◇「みすと共に五十年 井深功追想集」 井深和子 井深 功(中24)の妻
- ◇「落つる夕陽よ しばらくとまれ」 田中 正明(中29)
- ◇「東京裁判とは何か」 田中 正明(中29)
- ◇「対極桃山の美」 倉沢 行洋(高4)
- ◇「創立八十周年記念 会員名簿」 山下富貴子
- ◇「小倉勇進歌集 軌道」 小倉久夫(中27)
- ◇「響と空」(歌集) 奥村晃作(高7)



会員だより

飯田中学 落第坊主の頃

私は辺地の小村の村長のせがれで幼少の頃は泣き虫小僧の落第坊主だった。理屈にもならぬ無理難題を小作人の悪童共にかけるられ、家の金をちよろまかしてアメチョコを買ってやったり氣を取って漸く過した苦しい思い出がある。

当地の田舎の村長は書記よりも安い無報酬に近い給料でつとめていたらしく、小使銭に不自由したのだらう、自立たない書画を飯田や赤穂の町へ売りに行かされたものだ。私はこの使いが大好きだった。何がしかのピンはねが出来たのだからたまらない。(中略)

不良生徒の私は中学四

五年頃から松葉、馬場町のオキナなどへ出入りしライスカレーやコーヒートを飲む体たらくだった。

私は伊那電が飯田迄開通するまでは寄宿舎生活で上級生にしごかれ、試験会などでしごかれた思い出が苦しみと共に残っている。

楽しい思い出では千鶴堂のチョコレートや洋菓子の一袋を与えられる例会だった。

早熟だった私は一途に小説家志願で訳も分らぬ俳句や短歌、小説の真似を書いてなかなかの奮闘努力を続けた。(中略)

長じて東京遊学は落第坊主らしく日大文学部に入り、性こりもなくあやしげな小説らしきものを書いたが、所詮は無理と見て当時の大不況の頃おはやりの赤旗を振って

勉強はそっちのけ。幸か不幸か知らぬが、元京都博物館長の松下隆章が慶応ボーイで、久堅の坂井正人が早稲田、今は故人の古田勝美君が指導者で赤旗版りの指導をしてくれ、東京中の警察の留置場のクサイメシを大部食わされた苦い記憶が思い出される。

老骨となった今は、田舎新聞記者三十余年の退職金や女房の小使いを微発して骨董屋としてやれこみ、書画百点を手取ってぶらぶらしたが、一年半の飯田病院入院、続いて病後静養の今日此の頃は、七十歳で銭子はないが人生を楽しんでいる。

飯田の骨董市には二の日、十六日と欠かさず通って手持ち品売却して優雅な生活というところか？卑いところ所持品を処分して小使いに不自由せず、若い者には金も出さぬが口も出さぬ生活を満喫したいものだ。

向寒の朝、老人には不向きな季節だが、炬燵やぐらを貧乏ゆすりするのめ味なもの。

やがて年末、正月も来る。まだまだお陰様息災だから、あと十年は余生を送りたいものだ。何々

宮沢忠男(中27)

古畑恒雄

仕事柄、全国各地の保護司さん達とお付き合いが多い。そしてしばしば「御郷里はどこですか？」と聞かれる。「信州の飯田です」と答えたとき「天竜舟下りに行ったら立ち寄りしましたが、リンゴ並木があつて静かできれいな町ですね」と言われると、とたんに嬉しくなり話が弾んでくる。(編集者)

事務局だより

が、飯田と言ってもピンと来ない相手も少なくない。関東・中部を除く地の保護司さんはまずこの手合いである。そんな相手に飯田が伊那谷の中心地であることを説明すると、「伊那の助太郎の生まれたところですか？」と聞かれて面くらうことがある。流行歌「助太郎月夜歌」が生んだ架空の人物のPR効果の大きいことには今更ながら驚かされる。また、飯田と飯山を取り違えている人も存外多い。島崎藤村の小説「破戒」の舞台ではないかと、近く野沢温泉があつてよろしいですね、などという人がこの類である。

このような相手には南北に長い信州の地勢を説明しなければならぬ。「ホー信州人ですか。あそこの人皆頭が良いんですってね」と言われることも時々ある。

いささかアイロニカルな響きのある言葉の主は戦前の信州教育のレベルの高さを聞きかじったのだらう、そんなときには「おおむねそうです、なかには例外もありまして……」などと釈明することになっている。こうした話を通じ、相手との間で打ちとけた気分をかもし出す効果は大きい。と同時に我が郷里をチョッピリ自慢めいて紹介できるのが嬉しい。このあたりが、ふるさと談義の効用である。(高3)

「同窓会報について 前二十二号にて、御連絡致しました通り、同窓会報は、維持会費の完納者に限り、発送致します。友人・知人、又は近くの会員にて、同窓会報はどうなっているのだろうか、などの話を耳にされた場合には、右の条件をお話して下さい。維持会費を納入するよう、あなたからも、勧めて下されるようお願いいたします。

〔会員名簿について〕 次の「会員名簿」の発行が、昭和六十年といよいよ近づいてまいりました。末だ住所や勤務先の変更連絡が済んでいない方々は、今のうちに、郵送にて御連絡下さい。

又前号にて、御連絡申し上げました様に、昭和五十五年からの、五ヶ年分の維持会費を完納することが、基本であります。

(1) 同窓会報の発行に、御連絡を良くご覧の上、未納の方々は、至急納入下さるよう、御案内致します。発行後に、未納者より希望の問合せがあつても部数に制限がありますので、応じられないから、よろしくお願ひします。

(2) 幹事・評議員の方々にお願ひ

(1) 去る七月十七日(日)の幹事・評議員合同会議に出席された方々は、御承知の事ですが、維持会費の未納者に対する督促には、その同期の幹事・評議員の皆様が御苦勞することになりました。

従いまして、幹事・評議員の皆様は、本会と連絡をとり、同期生の中より、未納者を確認して、役員の方々と、未納者に連絡をとり、納入方を要請するよう、御願ひ致します。

(2) 前回の「会員名簿」とか、地域外転居のため還付で戻って来ている事、評議員の皆様は、直接、正式なお願ひを致してあります。

編集後記には、申し上げましたが、卒業年次(卒回)によっては、資料の提供やら、わざわざ事務局まで来室されて、名簿の原稿を訂正して下さい、積極的に御協力下さいました役員も多数ありました。

次回発行の「会員名簿」につきましては、同期会員の動静は、夫々の幹事・評議員の皆様が責任をもち、確認をいたし、正式にお願ひを申し上げる次第であります。

住所や勤務先の変更について、ハガキや手紙と、又は維持会費納入の際、振替用紙の裏面備考欄にて、御連絡して下さい。れる方々も多いのであります。然し毎年二〇〇通前後の郵便物が、転居先不明で配達できません。とか、地域外転居のため

会員計報

中32回 関島琴史 58.2.13	中33回 林 利治 58.3.27	中33回 鈴木芳郎 57.9.9	中33回 田村龍彦 58.9.24	中34回 田村哲郎 58.5.21	中37回 渋谷友義 57.11.27	中39回 岸沢 壽 57.9.16	中39回 林 実 57.4.26	中40回 星野政清	中40回 古島輝雄 58.5.18	中40回 新井久男	中40回 酒井 寛 (中47)	中40回 鳴谷 正男	中41回 北原啓史 58.6.26	中42回 小島 樹夫 58.4.13	中41回 北原啓史 58.6.26	中42回 小島 樹夫 58.4.13	中43回 千葉 一郎 58.5.28	中44回 今牧 隆	中45回 高橋義人 57.8.8	中46回 棚田益夫 58.6.25	中47回 川口英司 58.4.22	中48回 北沢 昭	中48回 小林秀雄 57.11.26	中49回 前沢時夫 58.4.22	中50回 城崎美 57.9.13	中50回 宮川公文 57.10.29	中51回 松島真由 57.10.30	中52回 田内国夫 57.4.1	中53回 三ツ橋健 56.6.10	中54回 北沢美津子 57.12.1	中55回 河津谷正 57.4.4	中56回 唐沢英臣 57.12.27	中57回 野口克久
-------------------	-------------------	------------------	-------------------	-------------------	--------------------	-------------------	------------------	-----------	-------------------	-----------	-----------------	------------	-------------------	--------------------	-------------------	--------------------	--------------------	-----------	------------------	-------------------	-------------------	-----------	--------------------	-------------------	------------------	--------------------	--------------------	------------------	-------------------	--------------------	------------------	--------------------	-----------

編集委員

当同窓会報の編集委員は同窓会より五名、校内幹事より五名計十名により構成されておりますが、二十三号は次の皆さんが委員として編集にあたりました。

同窓会より
馬場 滋 (中40)
酒井 寛 (中47)
平沢 秀明 (高4)
安達 謙一 (高7)
佐々木清平 (高7)
校内より
後藤 武巳 (中46)
木下 喬夫 (高8)
関川 明文 (高10)
北沢 豊治 (高11)
塚田 紀昭 (高12)

卒業生の進路情報

昭和57年度卒業生総数 373名(内女子132)。進学者 208名。没入 144名。就職20名であった。女子生徒の増加に伴い、短大・各種学校への進学者が増加した。

昨年と同じように国公立大学離れの傾向が見られ、私立大に向うものが増加した。()内は卒業生

北大	2(1)	経女大	6	大東大	20(11)	大東大	5(3)	大東大	35(17)	大東大	5(1)	大東大	1	大東大	19(10)	大東大	6(3)	大東大	42(26)	大東大	6(2)	大東大	3(1)	大東大	6(5)	大東大	4(1)	大東大	3	大東大	4(1)	大東大	4(1)	大東大	15(7)	大東大	6	大東大	90(45)
京大	2(1)	理大	20(11)	東大	5(3)	日大	5(1)	法大	1	立教大	19(10)	早稲大	6(3)	早稲大	42(26)	早稲大	6(2)	早稲大	3(1)	早稲大	6(5)	早稲大	4(1)	早稲大	3	早稲大	4(1)	早稲大	4(1)	早稲大	15(7)	早稲大	6	早稲大	90(45)				
立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)	立大	1(1)		
私立大	98(42)	私立大	14(5)	私立大	9(4)	私立大	15(8)	私立大	3	私立大	8(5)	私立大	21(11)	私立大	2	私立大	15(8)	私立大	2(1)	私立大	14(9)	私立大	6(5)	私立大	3(1)	私立大	2	私立大	7(4)	私立大	17(10)	私立大	6(2)	私立大	15(9)	私立大	6(1)	私立大	4(2)
その他	25(2)	その他	43(3)	その他	40(3)	その他	15	その他	6	その他	21	その他	25(2)	その他	43(3)	その他	40(3)	その他	15	その他	6	その他	21	その他	25(2)	その他	43(3)	その他	40(3)	その他	15	その他	6	その他	21				

校歌誕生の由来を大場先生(現下伊那農産高校教諭通称カラス先生)が諸々の資料を調べ、長稿を寄せられました。誰もが興味のある事柄でもあるので、編集委員協議の結果、特集しました。ご精読下さい。

幹事会に北原名田造大先輩(中11回元駒ヶ根市長)が、かくしゃくとした姿を見せられました。九十二才の由。ご本人は「ゴ田造」とおっしゃって居られたが、社者をしてその気迫は得に五十才代。この大先輩にあやかりたいと後輩一同談じ合った事でした。先輩、ますますお元気で過ごして下さい。